平成 22 年 8月 1 日
第 39 号

やかたばら環境通信

◇◇ 発行 ◇◇
八方原の環境を守る会
代表 原田憲一郎
電話 972・7602

山口国体の花いっぱい運動に景観形成花壇で参画



古い株を掘り出し、植え替え中。サルビアは花いっぱい運動の奨励品種です。苗は６班の重富勘市さんが育てたものを分けてもらいました。

山口国体を来年に控えて「花いっぱい運動」が全県的に展開されています。農地・水・環境保全向上対策協議会でも各団体の景観形成花壇を、花いっぱいにしようと呼びかけています。

当会の花壇も７月10日、遅ればせながら植え替えを行いました。今回はサルビアと菊を植えました。厳しい夏の日差しの中で大きく育つように、役員が協力して水やりや草取りなどで、大切に見守っていきます。

またもや、浸水被害か・・

昨年の再来かと思われるような激しい雨が７月14日未明から降り続きました。水利責任者の杉山さんは早朝４時から、水路の見回りを始めました。どんな状況になるのか予断を許しません。

北側の市道が冠水したのは午前８時頃でした。その後も水位は上昇を続け、八方原の農地も半分以上が冠水しました。

午前11時前の満潮を過ぎると次第に水位は下がり始め、何とか浸水被害などを防ぐことができ、大きな被害が出ることは避けられました。



八方原農地の大部分が冠水した（14 日 10 時、岡田地区より撮影）

新たな協定を締結「農地・水・環境保全向上対策」

八方原の環境を守る会では平成22年４月より事業の補助対象面積が増えたことから山口県農地・水・環境保全向上対策協議会を通じて山口市と協定書の変更を進めてきました。

新たに対象となった農地の面積と現況の確認など、手続きは簡単ではありませんでした。地図や書面でのやり取りを繰り返してようやく、６月23日協定書が出来上がりました。

面積で3.8ヘクタール拡大し２７，６ヘクタール、１年間に交付される金額も16万円程度多くなります。山口支部（山口市、防府市）の活動団体の平均面積がが１３５ヘクタールですから、私たちの地域は小さなものです。しかし、これらをいかに有効に使うかが求められていることは言うまでもありません。

農環境を巡る情勢は明るいものばかりではありませんが、できる限りの活動をしてまいります。

総踊りに40人が参加

7月24日のふしに夏まつりには当地区は40人近い踊り参加となりました。6班の神武さんは、韓国からの留学生3人も連れて参加してくれました。

区では例年の通り地区の集合場所を当日の朝確保に出かけましたが、いつもの場所は既に他の地区が確保していました。関係者に聞くと、早朝6時頃に来られたとか、場所取りも熾烈です。

宵闇が河川敷を覆う頃、恒例の花火の始まりです。夜空に一瞬広がる光の花を追うように。大きな爆発音が何度もこだましました。


夕暮れとはいえ暑さの残る河川敷　揃いの浴衣での踊り

子ども会の球技大会練習始まる

子どもたちにとって楽しみな夏休みが始まりました。八方原子ども会では、市子ども会小郡支部主催の球技大会に向けての練習が始まりました。

毎年行われる「ドッジビー」という競技は柔らかい材料でできた円盤を投げあうものですが、このところ八方原・森下連合チームは連勝を続けています。

今年のメンバーは低学年が多く、今までのようにはいきそうにありませんが、会長の山本さんと田良さんを中心に、熱心な指導が続いています。円盤を正確に投げる練習から、実践的な戦術まで、毎朝の練習で、8月1日の大会に備えています。


まず最初は正確な投球練習

「ふしの夏まつり」の移り変わり


午後からの開催に向けて準備の進むおまつり会場（当日午前撮影）

昨年は防府市や山口市を襲った集中豪雨の影響で開催できなかった「ふしの夏まつり」、今年は真夏の暑さの中7月24日、盛大に開催されました。

小郡の花火大会というと、それは県内どころか関西一とも言われたこともありました。昭和50年山陽新幹線の開通とともに東津河川敷きが分断されてしまい、従来規模での花火大会は出来なくなりました。数年間は開催できない状態が続きましたが、吉南青年会議所の有志たちが「もう一度十七夜のおまつりを」と現在のふしの夏まつりが復興しました。

青年会議所の功績

それから30年間、歴代の吉南青年会議所メンバーの「登竜門」的な行事となり。このイベントをどう切り盛りするか、若手経営者の腕試しと、先輩メンバーへの顔つなぎの行事となってきました。しかし、吉南青年会議所そのもののメンバーの縮小や、小郡地区の会員の少なさなどから、第30回を持って吉南青年会議所主導の大会運営は終わりとなりました。

新しい運営母体

昨年の31回目となるはずの大会は、さまざまな団体が集まって実行委員会を結成し大会開催に走り回っていたのでした。しかし、大会直前の災害で開催を断念せざるを得ませんでした。

今回は昨年のメンバーがそのまま引き継ぐ形ですが、この春に結成された「おごおり地域づくり協議会」の中での実行委員会となりました。実際には準備の開始が遅れたことなどから、思うように準備ははかどらず、大会開催に漕ぎ着けたのは本当に幸運だったようです。資金面では各ご家庭に寄付金を募るなど市民が支える夏まつりとして、定着しつつあります。全国的にも花火大会は市民参加型が多いです。

この夏まつりの今後はどうなるか今のところ分かりません。地域の風物詩になりつつある行事、なんとか守っていけると良いですね。